

色の体験型教材によるアクティブラーニングの試み

大阪芸術大学短期大学部 通信教育部保育学科 特任講師 藪 晶子

本研究は、色彩の基礎理論から応用的な知識、ならびに実際に色を扱うための技能の双方を重視し、全国美術デザイン教育振興会が実施する教育事業の一環であるアデックカラーマスター色彩士検定に対応した教育実践を目的として行ったものである。指定校である大阪美術専門学校において、総合デザイン学科の学生を対象に開講されている検定対策授業を担当し、その授業内容および指導方法の改善と検証を行った。

授業は、色の成り立ち、混色、色の知覚、心理効果など色彩学の基礎領域を網羅する公式テキストを中心とした講義形式を基本としながらも、学修者の主体的な学びを促進するため、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた体験型教材を併用して実施した。これにより、従来の一方向的な知識伝達にとどまらず、学生が実体験を伴って色彩現象に向き合い、理解を深める授業構成を試みた。

文部科学省が示す学習指導要領は、社会的背景や子どもを取り巻く環境の変化を踏まえ概ね 10 年ごとに改訂されている。幼稚園教育要領は 2018 年度より、小学校学習指導要領は 2020 年度より新教育課程が全面実施され「主体的・対話的で深い学び」の実現、すなわちアクティブ・ラーニングの視点に基づく授業改善が重視されている。本研究における授業実践はこうした教育的要請を背景とするものである。

色とは、光が物体に照射され、反射および吸収の過程を経て分化した波長の違いを視覚器官で受容し識別する感覚である。論者は、大阪芸術大学大学院博士課程修了論文「光の形—その考察と『ヒカリのカタチ』展への道程—」(2011)において、色を生成する光そのものについて理論的・造形的な考察を行ってきた。本研究では、これまでの研究成果を基盤とし、光と色に関する知見を教育実践へと応用することを試みた。

また、光を扱った先行的な教育実践として、イタリアのレッジョ・エミリア教育に関する既存文献を参照した。同教育は、社会性、時間、子どもの権利を尊重する理念のもと、自由な造形活動や保育ドキュメンテーションを通して子どもの主体性や協働性を育成する点に特徴がある。

本研究では、光の効果を取り入れた実践事例を分析し、体験型教材の試案作成に活用した。これまでの実践として、プリズムの代替として身近な素材である CD

を用いた分光器、複色色を塗布した円盤と独楽を組み合わせた回転による継時混色の体験教材、染色による色料混色を用いた衣装制作、絵本の図柄を変化させるカラーフィルムの覗き穴教材、光源色の照射および物体色の透過によって変化する図像教材の制作を行ってきた。本研究においては新たに、「混色による三原色から多色への展開」「蓄光素材および蛍光素材を用いた描画と鑑賞教材」、「カラーネットによる同化現象を応用した立体制作教材」の提案および開発を行った。完成した教材を用いて授業実践を行い、その教育的有効性について分析および考察を行った。

本研究の成果として、色彩学の理論的理解と体験的理解を結び付けた授業設計の有効性が示唆された。体験型教材を取り入れることで、学生は色彩の知識や現象を抽象的な概念として学ぶだけでなく、知覚や身体感覚を伴う現象として捉える姿勢を示した。また、光と色を主題とした教材開発は、学修者の主体的な参加を促し、授業内での対話や発見につながった。特に、蓄光素材や蛍光素材、カラーネットを用いた教材では視覚的变化が大きく、学生の関心を引き出すとともに、多様な作品制作へと発展する様子が見られた。

今後は、授業実践の効果をより客観的に把握するため、アンケート調査や到達度評価などを取り入れながら検証を進めていきたい。また、本研究で開発した教材は主として美術・デザイン系高等教育機関の学生を対象としているが、今後は発達段階の異なる学習者への活用も視野に入れ、初等教育や保育現場への応用可能性について検討していきたい。さらに、光や色を扱う体験型教材は環境条件や設備の影響を受けやすいため、より多くの教育現場で活用できるように、汎用性と再現性を高める工夫を重ねていきたい。

以上の実践を踏まえ、今後も教材の改善と授業実践を継続しながら、光と色を活用した色彩教育の可能性について研究を深めていきたい。